

『教行信証』では何が「易」で、何が「難」といわれているのだろう。
なぜ「難」なのだろう。

5

近藤 義行

1. はじめに

「総序」は、「ひそかにおもみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無礙の光明は無明の闇を破する恵日なり。」という文章から始まる。難思の弘誓・難度海という問題から始まる。総序の中
10 には、7 回「難」(叵)という言葉が顕れる。また 2 度易という言葉もある。テーマを選んだ理由として
は深い問題意識があったわけではない。そもそも、何が難で何が易なのか、難易の説示を通して
何が語られているのかを確かめたいと考えたからである。まずは、『教行信証』で、難・易について
どのようなことが語られているのか整理したいと考えたのである。しかし、全体を見通すことは今回
間に合わなかった。

15 そこで、本来の講題とは違うが、『教行信証』全体ではなく、「総序」に絞って検討したいと思う。ま
た、難易の問題の中でも「易行難信」に焦点を絞り、「易行難信」と“私”との関係について考えて
みたい。非常に課題が漠然としたままであり、知識的な解説ばかりになるかもしれないがご容赦い
ただきたい。

2. テーマについて

20 なぜ自分がこのテーマを選んだのか。あらためて考えると、自分の中に、「易しければやるが、それ
が難しければやらない。あるいは、それが本当に達成できるのであれば、やろうと思うが、それが達
成しないのならやらない」というような、功利的で怠惰な考えがその根底にあるのではないかと思
当たった。

25 しかし、何かそのような功利的なありかた・考え方そのものが自分を粗末にしているのではないだ
ろうか。しかし、おそらくはそのような私の性質が「易往難信」という課題と無関係ではないように思
う。そのような予感に立ちながら、総序で言われる、難易の言葉を追いながら「自分の課題とは何か
ということを」を問うてみたい。

メモ 安田理深師の言葉

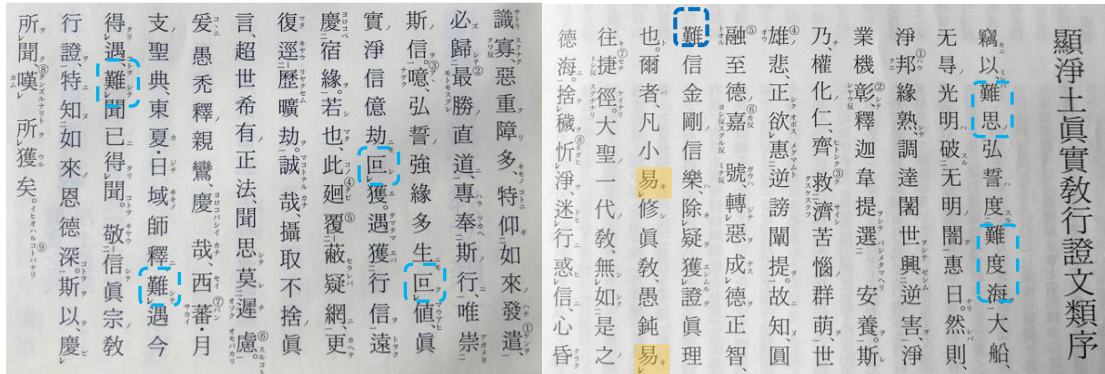
30 「教育にしろ宗教の仕事にしろ、殆ど絶望的なのである。しかし、絶望的だからとあきらめられるもの
なら、やらない方がいい。その絶望するしかないにもかかわらず、本当に立ち上がっていくことができ
る、絶望であってもやろうと、こういうのが宗教心だ。世間心は計算して出来ることならやる。出来な
いとなったらやらない。こういうのが世間心、功利心。しかし求道心は出来るとか出来ないとかは問
題ではない。出来ないから止めるというなら、そんなものは宗教心でない」

35

(本多弘之『微笑の素懐』、文栄堂、1986年、63-67頁)

3. 本文について

〈原文〉『浄土真宗聖典全書』II、6-7頁



本文を見てわかるのは、後半の2つの難は巨という字が使われているということである。

4. はじめの一文について

ひそかにおもみれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、
無礙の光明は無明の闇を破する恵日なり。

⇒人間にとって、本当に大切なことは何かということが確かめられているのではないだろうか。

ここでは「無礙の光明」という如来の果を以って、我らの生死の因である無明を破り、「難思の弘誓」という如来の因を以って衆生の果である難度海を度するということが述べられている。つまり、無明を以って生死流転している我らの因果が、我らの努力をまたずして、既にそれが如来として応えられていることをあらわすのである。だから、我々には我々自身の力で難度海を超えたり、無明を破る必要はないのである。我々の努力で破るとすれば、無明の中で無明を破ろうとするようなもので、破ること自体もまた無明かもしれない。如来に帰するところに、如来の光明をたまわるのである。(安田理深「総序聴記」『選集』十五卷上、七七頁)

⇒難度海だと、本当に度し難い迷いである。また無明を抱えた存在である。

「仏道」というのはとにかく歩み難いのです。「世間道」、つまり幸せを求める事なら人間はやります。けれど「仏道」というのは幸せを求めるのではなく、迷いから離れる根本的な解決を求めるわけです。要するに生まれてきたことの本願が満たされる。何しに生まれてきたかということが成就しなかったら、どれだけ幸せだと言っても、空しく終わるんです。私たちが死に切れないのは、生まれてきたということがどういうことなのか、分からないまま死んでしまうのが嫌だからです。生まれてきたことを満足して死にたいわけです。ところがどうすれば満足するのかわからない。仏道を求めるのは幸せを求めるのとはちょっと違って非上に難しいです。(佐野明弘『真実の信心』十七頁)

5. 易について

凡小修し易き真教、㊦愚鈍往き易き捷徑なり。

円融至徳の嘉号、つまりお念仏の教えは、凡夫が修め易い、真の教えだということ。

5 →お念仏の教えは、愚かなものが往き易い近道だと示される。

ここでは、念仏が修し易いのだということ、また、往生し易い近道だと説かれる。大経にも。

『大無量寿経』

宜しくおのおの勤めて精進して、努力自らこれを求むべし。必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん。道に昇ること窮極なし。往き易くして人なし。その国逆違せず。自然の牽くところなり。(初版、57頁)

10

難行易行を説いたのは龍樹である。

龍樹大師世にいでて 難行易行のみちおしえ

流転輪廻のわれらをば 弘誓のふねにのせたまう(四九〇頁)

15

生死の苦海ほとりなし ひさしくしずめるわれらをば

弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける(四九〇頁)

難行陸路、苦しきことを顕示して 易行の水道、楽しきことを信樂せしむ。(二五〇頁)

20

…人間は、状況存在である。他人の話に真剣になれといっても、なかなかそうはいかない。状況とともに流されていて、流されていることの自覚がない。またそういう流転の存在は決して状況を脱出できない。⇒難行・菩薩道は、出られる如くに教える。流転輪廻を超える道として仏道を生きよという。しかし、人間はそうなれない。そこに説かれたのが易行である。

道綽も、末法においては、浄土のみが凡夫の救われる道であると説いている。

25

本師道綽禅師は 聖道万行さしおきて 唯有浄土一門を 通入すべきみちととく(四九四頁)

末法五濁の衆生は 聖道の修行せしむとも ひとりも証をえじとこそ 教主世尊はときたまえ(四九四頁)

信巻にも、

30

しかるに常没の凡愚・流転の群生、無上妙果の成じ難きにあらず、真実の信樂實に獲ること難し。何をもつてのゆえに。いまし如来の加威力に由るがゆえなり。博く大悲広慧の力に因るがゆえなり。(「信巻」冒頭部、初版、二一一頁)

⇒さとりを開くということは困難なことではないといわれる。如来の加威力に由るがゆえなり。博く大悲広慧の力に因るがゆえ。

35

6. 難について

では、いったい何が難と語られているのであろうか。

ああ、弘誓の強縁、多生にも値い叵く、真実の浄信、億劫にも獲叵し。

5 ここで叵の字を用いて語られているのは、弘誓に値うことの不可能性。そして、信心を獲ることの不可能性である。

安田先生は、「噫」という言葉は感動をあらわす言葉であるという。

10 「噫」という言葉は深い喜びをあらわすと同時に、悲喜、悲しみの意味もこめられている。単なる軽い喜びでなく、悲しみを通じた喜びである。そこで、仏法に遇うたことの容易ならないこと、「弘誓の強縁、多生にも値い叵く、真実の浄信、億劫にも獲叵し。遇行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」と出ているように、深い感動の内容というものはどういう内容であるかといえ、ここに「叵」という字が出ている。(安田『選集』十五卷、三〇七頁)

総序では叵と難が使い分けられているが、安田理深によれば、この使い分けは、善導の『観経疏』「散善義」の後跋文に依ったものだという。(安田理深『選集』15卷上 総序聴記』p.307)

窃^ニ以^{レバ}真宗叵ク^レ遇^ヒ、浄土之要難シ^レ逢^ヒ。(「散善義」『浄真全』I・七九三頁)

15 親鸞は、でたらめに難と叵を使っているのではなく、善導の文字に習っているのである。

難と、叵に使い分けがあるのだろうか。すべてを確認できていないが、真宗に会う場合が叵で、信心を獲る場合が難と決まっているわけでもないようである。なぜなら、『浄土文類聚鈔』では、

20 噫弘誓強縁多生難値 真実浄信億劫叵獲 遇獲信心遠慶宿縁(初版、四〇九頁)

と、弘誓に値うことが難であり、浄信を獲るのが叵されている。信を獲ることが難になっている個所もある。

安田先生は、

25 そこには多少区別がある。「難」の方は易に対して困難だという意味、「叵」の方は不可能の意味。そういう区別があるのではないかと思う。同じ「かたい」といっても difficulty(困難)という意味の「難」と、impossibility(不可能)という意味の「叵」とがある。遇おうと思っても遇えず、獲ようと思っても獲られないもの。我々の思いをもっては全く不可能なものが「叵」である。「難」の方は、思いを尽くしたということ。「叵」の方は、思いをもっては全く不可能という意味である。だから「噫」という感嘆の意味は、「かたい」という内容をもった感嘆の意味である。我々が仏法に遇うたということは、思い通りのことができたということではない。全く不可能なことが可能になったような意味をもつ出来事である。仏法に遇うたのだから、遇うことができたのであるから可能になったのだが、可能になったのが不可能な出来事であるということ、不可能が可能になったということ、そういう意味がある。また「難」とは容易ならぬこと、一朝一夕のことではないということ。このように獲てみれば獲たままが

35 容易ならぬ出来事ということをあらわす。感動といえ、そういう意味を持っている。…また「真実の

浄信、億劫にも獲叵し」といってあるのは、第三節の「難信金剛の信樂」を承けてある。…帰敬したということ自身が容易ならぬことであると、前半を承けて、そこに深い感動をあらわしてある。帰敬しようと思って帰敬したのではない。帰敬することができたのだということ。我々が帰敬したのは、帰敬することができたのであるということである。(安田『選集』十五卷、三〇八頁)

5 安田先生は、

「弘誓の強縁」については「値い叵」といわれ、「真実の浄信」については「獲叵」とある。だから深い感動も、「値い叵」く「獲叵」という感動である。法については「値い叵」い。機については「獲叵」というわけである。(安田『選集』十五卷、三〇八頁)

10 『略文類』を見ると、「値い難く…獲叵し」と、カタイという文字が二つ使われているが、これは善導に依られたものである。「散善義」の跋文に「真宗遇い叵く」、「浄土之要逢い難し」とある。「真宗」とは本願、「浄土之要」とは定散二善である。これは同じところに出ている言葉だが、親鸞は、前者を「行巻」に、後者は「化身土巻」に引用されている。どちらも「あいがたし」だが、「叵」の方が重い意味を持っている。「難」は不可能というより容易でないということ。容易でないがしかも出来るということである。「叵」は全く不可能ということである。そこに「遇」という字が使ってある。

15 そこで『略文類』を見ると「弘誓の強縁、多生にも値い難く、真実の浄信、億劫にも獲難し」となっている。『略文類』には「浄土の文類聚を用いるなり」とある。「浄土の文類聚」とは『教行信証』のことであろうから、『略文類』は『教行信証』によってつくられたのである。だから「総序」の言葉がもう一度いわれているのである。

20 ところで、「総序」では「弘誓の強縁」も「真実の浄真」も「叵」の字を使っている。「叵」に重要な意味があるわけである。「叵」の前は、人間に迷っていたのである。人間に生まれても、仏に会う人も遇わぬ人もある。仏に遇って法を聞いても、本願の法に値うことはなかなか難しい。だから「難中之難無過斯」といってある。仏法に遇うこと、自分が信を獲たことは、「難中之難」である。だから、どちら

25 とも「叵」といわれているが、『略文類』では信の方に重点を置いて、仏法に遇うことも容易ではないが、信を獲ることは更に容易でないことをあらわしてある。だから、「人身受け難し」ということが始めにあるのである。仏法に遇って信を獲るのは特別な事件ではない。人間に生まれたという意義が初めてそこに成就するのである。仏法に遇って信を獲なければ、人間に生まれた意味などない。生まれ難いも生まれ易いもない。つい生まれたということになる。何も意味などない。人間に生まれた意義はあるから発見するのではない。人生というのは生きる意義があるのか、ないのかということとはわからぬこと。あるからあるということではない。

30 人生の意義というものは自覚した人にあるのである。見いだすのである。人間に生まれようとして生まれてきた者はいない。思いを超えて生まれてきたのである。もし生まれようと思って生まれたのが人間であるなら、人生に意義があるか、ないかなどということもいえるが、思いを超えて与えられているのだから、意義があるか、ないかなどとは言えない。人生の意義は予定的にあるのではない。

35 初めから予定されてあるのではない。人生の意義を明らかにするために人生があるのである。

ただ生まれたから、結婚して職をもって死んでしまうというだけでは尽きないものがある。気にか
 かるものがある。形而上学的意義がある。その人生の形而上学的意義を明らかにするものが仏道
 ということになる。始めに生まれたということ、最後に信を獲るとということ。信を獲るとことによっ
 て、初めて、人身は獲難くして獲たものであるということ、生まれたことがかたじけないということが表
 5 明されてくるのである。親が勝手に生んだものということは、形而上学的意義を失っていることであ
 る。親が勝手に生んだものというのは資本主義の解釈、資本主義的自覚である。それは形而上学
 的自覚がないのである。だから、資本主義的自覚や社会主義的自覚でも、それを超えることはでき
 ないのである。(安田『選集』十五卷、三四六-三四七頁)

- 10 ⇒安田氏の言葉。強烈な言葉である。だが真実である。真実の言葉であるので非常に厳しい、でも
 限りなく優しい。我々は何のために生まれたのだという。しかし、予定的に人生の意味があるのでは
 ない。なぜなら「人間に生まれようとして生まれてきた者はいない。思いを超えて生まれてきたので
 ある」からだという。私たちは、資本主義的意識だけで生きている。だから、生まれたことも資本主義
 的の原理で考えようとする。そこに人生の形而上学的意義を全く見失っていると安田は喝破する。
 15 我々は、徹底的に資本主義的思考しかないので、そのことがわからないのである。

7. 難叵という表現がされる部分

者即无明也、涅槃經(北本卷三十四)言、闇即世間、即出世、闇即无
 明、即智明、上、
 次言信樂者、則是如來、滿足大悲、圓融无碍、信心海、是故、疑蓋
 无有、問難、故名、信樂、即以、利他、回向之、至心、為、信樂、體、也、然、從
 无始、已來、一切、群生、海、流轉、无明、海、沈迷、諸有、輪、繫、縛、衆、苦、輪
 无、清淨、信樂、法、爾、无、眞實、信樂、是、以、无、上、功、德、難、叵、值、遇、最、勝
 淨、信、難、叵、獲、得、一、切、凡、小、一、切、時、中、貪、愛、之、心、常、能、汚、善、心、瞋
 憎、之、心、常、能、燒、法、財、急、作、急、修、如、貪、頭、燃、衆、名、雜、毒、雜、修、之
 善、亦、名、虛、假、諛、偽、之、行、不、名、眞、實、業、也、以、此、虛、假、雜、毒、之、善、欲
 生、无、量、光、明、土、此、必、不、可、也、何、以、故、正、由、如、來、行、善、薩、行、時、三
 業、所、修、乃、至、一、念、一、剎、那、疑、蓋、无、雜、斯、心、者、即、如、來、大、悲、心、故
 必、成、報、土、正、定、之、因、如、來、悲、憐、苦、惱、群、生、海、以、无、尋、廣、大、淨、信、
 回、施、諸、有、海、是、名、利、他、眞、實、信、心、

図1

具、縛、群、萌、穢、濁、凡、愚、无、清、淨、信、心、无、眞、實、信、心、是、故、眞、實、功、德、難、
 值、清、淨、信、樂、難、叵、獲、得、依、之、闕、釋、意、愛、心、常、起、能、汚、善、心、瞋、嫌、之
 心、能、燒、法、財、苦、勵、身、心、日、夜、十、二、時、急、走、急、作、如、貪、頭、燃、衆、名、
 雜、毒、之、善、亦、名、虛、假、之、行、不、名、眞、實、業、也、以、此、雜、毒、之、善、回、向、彼
 淨、土、此、必、不、可、也、何、以、故、正、由、彼、如、來、行、善、薩、行、時、乃、至、一、念、一
 剎、那、三、業、所、修、皆、是、眞、實、心、中、作、故、疑、蓋、无、雜、如、來、以、清、淨、眞
 實、信、樂、回、向、諸、有、衆、生、本、願、成、就、文、經(卷六)言、諸、有、衆、生、聞、其、名
 號、信、心、歡、喜、聖、言、明、知、今、斯、心、即、是、本、願、圓、滿、清、淨、眞、實、信、樂、
 是、名、信、心、信、心、即、是、大、悲、心、故、无、有、疑、蓋、三、者、欲、生、即、以、清、淨、眞
 實、信、心、為、欲、生、體、然、流、轉、輪、迴、凡、夫、曠、劫、多、生、群、生、无、清、淨、回、向
 心、亦、无、眞、實、回、向、心、是、以、如、來、因、中、行、善、薩、行、時、三、業、所、修、乃、至
 一、念、一、剎、那、无、有、非、回、向、為、首、得、成、就、大、悲、心、故、如、來、以、清、淨、眞
 實、欲、生、心、回、向、諸、有、衆、生、本、願、成、就、文、經(卷六)言、至、心、回、向、願、生
 彼、國、即、得、往、生、住、不、退、轉、聖、言、明、知、今、斯、心、是、如、來、大、悲、招

図2

20

「信巻」『浄土真宗聖典全書』八三頁(初版228)『浄土文類聚鈔』『同』二七三頁(初版416)
 「三心一心」問答の「信樂釈」においてのみ、「難叵」で「かたし」と読ませている。

たとえば千歳の闇室に、光もししばらく至ればすなわち明朗なるがごとし。(聖典第一版、二七四頁)

と譬えていますように、千年の闇であっても明るみが来れば闇は一瞬にして去るのです。「俺は千年もいたから、もう少しいたい」というわけにはいかない。光が射せば闇は一挙になくなるのです。そういう譬喩によって、本願の名号に触れるならば、たとえ迷いの歴史がどれだけ長かろうと、罪の歴史がどれだけ重かろうと、一挙に翻るということが押さえられているのです。

ところが我われには、なかなか光が射すという事実が発らない。それを発らなくしているものが覆蓋、あるいは疑蓋です。我われを覆っている疑いによって、光が射すという事実が発らない。曇鸞大師は、それを決定心がないと押さえられました。つまり決定できないことが疑いなのです。人間の分別はいつも、人生を「ちょっとまてよ」というように見ながら生きている。疑いということは猶予ですから、「ちょっとまてよ」という感情として起こってくるのです。私たちの人生は、事実としては一回限りの時間、二度と繰り返すことのない一瞬一瞬の命を、身体が引き受けて生きている。しかし分別理性は、それをどこかで横から眺めるようにして、これが本当の人生ではないのではないか、もっといい人生があるのではないかと考えている。つまり、この人生を本当の一回限りの我が命として引き受けなくて、ちょっと横に退いて見ているわけです。そういう意識が人間に起こる。そこにもうちょっと良い状況が与えられないかと、不平不満が起こるわけですね。そういうあり方を疑いという。つまり、決定できないことが疑いなのです。この命を、自分のかけがえのない、一回限りの命として引き受けなくて、もっといいことがあるのではないか、「何故こんなにつまらない人生なのか」というかたちでしか意識が起こってこない。そういうあり方を疑いと言うのです。だから、一般的に言うような、何かこれがちょっとわからないとか、これがちょっと怪しいとかいう疑いではなく、存在のあり方が「疑い」という言葉で押さえられているのです。ここで問題となっている疑いは、一般的な疑いよりも、もっと深層と言いますか、存在のあり方そのものが疑いに覆われていることを意味します。

(本多弘之『新講 教行信証』第一巻、一八八―一八九頁)